

フィナーレに向けて

校 長 武井 正明

「走れメロス」という太宰治の作品がある。悪い王様の生け贄となり、貼り付け台に上っている親友を救うため、約束の刻限に間に合うよう、ひたすら走るメロスの物語だ。

私は、県大会を懸けた中之島体育館、対東北戦。ラスト 60 秒、死力を尽くして走る男子バスケット部の選手ひとりひとりの姿に、メロスを見た。

…それだから、走るのだ。信じられているから走るのだ。間に合う、間に合わぬは問題ではないのだ。…わたしは、なんだか、もっと恐ろしく大きいものの為に走っているのだ。



彼らの一途な眼を見ていたら、しぜんとこの一節が浮かんできた。何の迷いもなく、真剣に、疾風のごとく走り続ける彼らの姿に、まさにメロスを見たのだ。あのコートを走った君たちなら、メロスの気持ちが理解できるだろう。もうカメラの手が、感動で震えていた。

私はカメラの素人だ。だからあくまで素人の戯言だと思って聞いてほしい。何千回、何万回とシャッターを切っていくと、素人でもさすがに見えてくるのだ。レンズの向こうに見える真実（ほんとう）が。

県大会出場を決めた 3 年生の君たちにも、中学校での競技生活の終幕は、確実に近づいているのだ。そのあなたたちに、敢えて言いたい。

大切なのは勝ち負けではない。

総てが終わった時に、何を遺すか、だ。何も残らなければ意味を失う。

その種目に初めて触れて以来、ここまで来るまでには、いろんなヤマがあっただろう。

それを君たちは確かに乗り越えてきたのだ。

チーム競技であれば、ひとりでは決して乗り越えられない。みんなで乗り越えてきた。

だから、勝ち負けよりも、大切な何かが見えるはずだ。見えなきゃならないと思う。

私になぜ、こんなにも君たちをカメラで追うのか。

それは、そこに君たちの本気が見えるからだ。君たちの真剣な眼が、何よりも私を惹きつけてやまないからだ。忘れがちな大切なものを、君たちの眼が、思い出させてくれる。

喜びも、悲しみも、苦しみも、みんなで分かち合い、乗り越えてほしい。

その先に、見たことのない素晴らしい景色が、きっと広がっているはずだ。